九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 『論理哲学論考』における写像理論と「名」の論理文法

柏田，康史

https://doi.org/10.15017/1397691

出版情報：哲学論文集. 21, pp.23-42, 1985-09-20. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

# 『論理哲学論考』における写像理論と「名」の論理文法

柏田康史

## 一　写像理論の意味

『論理哲学論考』（以下、『論考』と略記）においてウィトゲンシュタインは、自らの哲学を「言語批判」ということばで規定している（四・〇〇三一）。[1] この言語批判のもくろみは、言語の可能性の条件を問うことによって、哲学の諸問題に新たな照明をあてることにあった。この探求は、以後さまざまなヴァリエーションと展開を経て、彼の生涯をつらぬく哲学的方法となった。『論考』はその出発点である。ここでは言語の可能性の条件は、言語表現のうちに存するア・プリオリで純粋な要素を、数学的な明示性を範とした論理形式として析出する、という作業で追求されている。『論考』と、それに先立つ彼のノートブック（『草稿』）は、そうした追求の思索の類まれな美しい表現である。

『論考』では、何ごとかを真もしくは偽という仕方で語る機能に着目して、言語の「意味」の問題が考察されている。それは大別して、(i)「真理関数」の理論、(ii)「写像」理論、によって与えられる。

(i)について。　言語とは「命題の総計」である。命題は、その真理値を決定するにあたっていくつかの要素に分析されねばならないとすれば、真理値をになう最終単位としての命題に到達せねばならない。このようにして論理的に要請されたものが「要素命題」である。そこで、「命題は、要素命題の真理関数である」(五)というテーゼが与えられる。つまりここで命題の意味は、その真偽が要素命題の真偽の可能性に従って一義的に定まる、という真理条件によって規定される。

(ii)について。　『論考』においては、ひとつの事態を記述する要素命題は、他の事態を記述する要素命題から独立している、と考えられている。つまり、要素命題の真偽は、他のいかなる要素命題の真偽にも依存しない(関数でない)。これは、要素命題が記述する世界の諸事態の存立・非存立は相互に独立である(二・〇六二)というテーゼにもつながる。このことはむろん形而上的独断なのではなく、要素命題とはその本性上他のいかなる要素命題の関数ではない、という真理関数の理論に論理的にもとづくのである。そこで、要素命題の意味は、他の要素命題の意味との関連においてではなく、それ自身の内部、即ち、命題とそれが語る事態との関連において問われることになる。これを与えるのが写像理論である。つまり要素命題の意味とは、それが述べるところの事態であり、その事態が成立しているかいないかによってその真偽が定まる、という真理条件によって規定される。

以上のような、真理関数の理論と写像理論の場面の相異、およびその関連をもう少し検討しておこう。(i)で述べたように、命題は要素命題の真理関数であり、そして要素命題も「それ自身の真理関数である」(五)とされているのだから、これによれば、全ての命題(‖言語)の意味は、真理関数の形成規則によってつくられる構文論の体系の内部にあることになる。実際、ウィトゲンシュタインが真理関数の理論でもくろんでいたことは、このような言語の自律的体系をつらぬく論理的規則を定式化することであった。そうしたもくろみが成功しているかどうか、あるいはそもそも成功しうるのかどうかという問

題は別にして、少くともその方向で言語の意味は論理的な規則（ルール）の中で自律するとみなされる。

だが、このようにしてつくられる論理の体系は、たとえそれ自身で完結したとしても、それだけではまだ単なる記号の操作の体系にすぎない。それが世界を語る言語であるためには、その論理がつくりなす体系の基本単位となる命題が外なる実在世界を写している、というふうになっていなければならない。これが「要素命題」である。実際、真理関数の理論は、ひとつひとつの要素命題がすでに単独で意味をもっている、ということを前提しているのである。確かに、「要素命題はそれ自身の真理関数である」[2]（五）と言われている。これは、要素命題をPとすると、〝Pが真のとき、Pは真である〟〝Pが偽のとき、Pは偽である〟ということを言っている。しかし、これが無意味な同一性命題でも循環でもないとすれば、それぞれの文の前半と後半とは異なった意味をもっているはずである。後半の真偽はたしかに真理関数の値として与えられる。しかし前半の真偽は、それとは別の仕方であらかじめ与えられうるのでなければならない。それが具体的にどのような仕方であるかはともかく[3]、それは、要素命題が述べているひとつの状況が、事実として成立しているかいないか（即ち、命題と事実との比較）、というかたちで与えられるだろう。つまり要素命題は、世界を構成しうる様々の原子的事態をそれぞれ直接に描写し、そしてその事態が現実に存立するか否かによって真偽が決まる――、という仕方で「意味」をもつのである。

そうすると恰も、要素命題を境として、一方で言語の論理の自律性を目ざす形式的な連関があり、他方で、言語と言語外のものごととの対応によって、言語に実質的な意味内容を与える手続きがあるように見える。かかる二面性は、既に意味をもって日常使われている言語を前提し、そして次にその言語の意味の形式的連関を初めて「論理学」として問うという、従来自然に受け継がれてきた枠組みにも表われているように思われる。実際、ウィトゲンシュタインの師であったラッセルは、一方で『プリンキピア・マテマティカ』で論理の自律的体系化を目ざしながら、他方で、言語に実質的な意味内容を与えるために、言語と言語外のものごとを直接に結ぶような経験論的認識論に携わっていた（むろん、それらの表現には従来とは異なる新しさがあったが）。

しかしここには多くの問題がひそんでいる。これまで論理学が前提してきたように、言語がすでに意味をもっているということ、この原初的なかたちは何なのか。言語が世界の事物を写すことによって意味をもつとはどういうことか。言語と〝言語外〟の事物との関係の本質は何か。そしてこれらのことはそもそも「論理的」な問題なのか……。

フレーゲはこうした問題を「論理」の問題として正面からとりあげたのであった。そしてウィトゲンシュタインも、このような言語の意味の問題を、言語の成立の可能性の条件への問いとして位置づけ、その論理的な規則を探究した。『論考』の写像理論はその最初のかたちである。そして彼の以後の哲学の展開は、〝『論考』からの離反〟というより、そのモチーフに多様性と柔軟性を与えることによって、言語の意味を定める「論理的な規則」という概念を、可能なかぎり深め拡張することであったといえよう。何はともあれ、ここで写像理論、即ち、言語は実在の写像であるということが、いかなる意味で「論理」の問題なのかを見てゆこう。

## 二　「写像」の概念、「名」と「命題」

「写像（Abbildung）」ないし「像（Bild）」はまず、〝観念像〟や〝表象像〟といった意味あいはもっていない。そうした心的領域に属するカテゴリーは使われない。像はそれ自身、世界にある諸物と同様、知覚的な対象物としての側面をもつ。このことは、像が写像していることがら、即ちその意味を像自身において知覚的に明示するために不可欠な側面なのである。

ところで絵画や写真、スクリーンに写る映像といったものは、それらが何ごとかを真もしくは偽という仕方で写している（描写している）ものと解されるかぎり、写像と呼ぶことができる。しかし『論考』における写像としては、こうしたものよりも、その表現様式がより抽象化された地図（略図）とか、模型による描写といったものの方がその性格をとらえやすい。たとえば、模型を使って事故の状況を再現したり（ウィトゲンシュタインが写像のモチーフを得た例）、敵の陣地の配置を構

成したり、分子のモデルを作ったりする場合である。これらのものは、写真や通常の絵画よりも、像の分節的構造化が、それを作ろうとする我々の意図において或る仕方で単純化されており、写像しようとする現実との関係においてより明確化されている。例えば模型を使って敵の陣地を描写しようとする場合、描写に必要なかぎりでの構成要素が事実の側の構成要素と一対一の対応をもって選ばれ（〝これは橋、これは砲台……〟というふうに）[4]、それらの諸要素がある特定の形で配置される。この配置の仕方は、三次元的な表現の可能性に従って何通りか作ることができる。その中で、現実の側の配置と一致する像が真となる。

以上の例によって、ウィトゲンシュタインの写像に必要な性格づけは与えられている。即ち、(i)現実の要素にひとつづつ対応する像の「要素」（これは、対応づけられていさえすればよいので、似ている必要はない）、(ii)その諸要素の配置の形（「構造」）[5]、(iii)様々な可能な配置の形を包含する「描写の形式」。――この三つのものは、像と写像される事実との間にひとつの投射関係を形成する。重要なことは、これら三つの要件が相俟って一体となって「写像」となる、ということである（これはあとで、「名」の意味の問題を考えるときに重要である）[6]。要素は構造の中の要素であり、そして構造は形式の中の構造である。このように、ある描写の形式の中でどれだけの要素がどのような構造を形成しているかというその分節的構造が、像の「意味」に他ならない。即ち像は、〝これこれの要素がかくかくの仕方で関係している〟というふうに、その意味を示すわけである。そしてその写像は、われわれが事態をそのように思考し把握しているということの表現である。そして像はそのような仕方で事態を投射するのだから、写像される事態の側も同じ分節性をもっていなければならない。それゆえ、ひとつのものをひとつのもので表わしたり、多様なものをひとつのもので表わすという関係は、写像関係なのではなく、意味を成さない。像は、「分節しているときにのみ、ある状況の像となる」（四・〇三二）のであり、そして「それが描写する状況と正に同じ割合に分割されねばならず、両者は同じ論理的（数学的）多様性をもたねばならない」（四・〇四）。

かくして、事態に対して投射関係をもつ像のこの分節構造が像の「意味」なのであり、それは、事態がどのように写像さ

れているのか、そしてそれがいかなる仕方で真もしくは偽でありうるのか、を像それ自身において示している。

以上のような「写像」のモデルは、さまざまな形式の描写に実際適用されている。地図や楽譜、化学の分子式や力学モデルやシュミレーション……。しかしウィトゲンシュタインの意図は、これによって言語表現のひとつの本質を明らかにすることにあった。即ち写像のモデルは、「事態はかくかくである」という仕方で事実（世界）を記述する言語の論理を考察するためのモデルなのである。

さて、写像の成立にかかわる三つの要件について、(i)像の要素には「名」が、(ii)その諸要素を特定の仕方で結合してできた構造には「要素命題」が、そして(iii)描写（写像）の形式には命題の「論理形式」が、それぞれ位置づけられる。つまり要素命題は、これこれの名がかくかくの仕方で関係づけられているということを示すことによって、諸物（諸対象）がどのように関係し合ってひとつの事態をなしているか、を写像する。「ある名はある物の代理となり、別の名は別の物の代理となり、そして名同士が互いに結びつけられるとその全体が――活人画のように――一定の事態を出現させる」（四・〇三二一）。

ここで「意味」の問題は、二つの根本的にレベルの異なる働きで提示されている。ひとつは、「名」による対象の「代理」ということ。もうひとつは、名の合成によって表わされる「命題」による写像ということ。この二つのことは言うまでもなく、意味論の最も基本的な二つのカテゴリーである名と命題、指示と記述に対応している。そして、ウィトゲンシュタインの写像理論による意味論のひとつの特徴は、その二つのカテゴリーの論理的な区別を徹底しようとしたことにある。即ち、名の意義（Bedeutung）は対象（物）であり、その論理的機能は代理もしくは指示である。命題の意味（Sinn）は事態ないし事実であり、その論理的機能は記述である。両者の混淆は許されない。というのも、両者の論理的機能を峻別し固定することによってのみ意味の「明晰性」という基準がみたされる、と思われるからである。即ち、像が何をどのように写像してい

るか、そしてそれがいかなる仕方で真もしくは偽となりうるかを一義的に像自身において明示するためには、像の要素（名）は対象を代理あるいは指示し、像の全体（命題）がはじめて記述を行うという、写像の分節的構造化がその論理的多様性においてただ一通りの仕方で確定していることが求められるのである。「命題の完全な分析はただ一通りしかない」(三・二五)。[7]

このような条件をみたし、名（指示）と命題（記述）の論理文法を明らかにしてゆくためには、様々な問題が検討されねばならない。特に写像理論のひとつのキー・ポイントは名の意味の問題にあると思われる。名は、分節化の出発点であり、分析の到達点であり、それらから要素命題が形成される意味のひとつの基本的構成要素である。そしてこのことが、名の意味の問題を難しくしている。つまり、この名をいわば穴として、言語の意味は〝言語の外〟に出るように思われるからである。名は、代理ないし指示という関係で物と結びつくことによって、言語に言語外の世界とのつながりをはじめて与え、そしてこのつながりこそが言語に実質的な意味の源泉を与え、そのようにして世界を写すということを保証するように見える。そしてこれらのことは、「名」というものに対するわれわれの自然な見方であるとも思われる。――しかしここには検討すべき多くの問題点がある。

## 三　「名」の論理文法（一）

〝名と対象（物）との結びつき〟――これによって言語は実在界と結びつくと考えられる――とは、いったいいかなる関係なのか。例えばそれは、何らかの脈絡の中で必要となる物の代わりにある記号ですますことができるということである。これをひっくり返して言えば、何らかの脈絡の中で現われるその記号はその物を指しているということになる。そのような使い方をする記号が「名」である。しかし、このような使い方ができるためには、その記号がその物の「名」であることがあらかじめ了解されていなければならないように思われる。つまり、名づけが先行しているはずである。では名づけとは何

なのか。それは、ある記号をある物の代理もしくは指示という仕方で使う、ということのとり決めに他ならない……。かくして、「代理」「指示」「名づけ（名指し）」等々の概念は、同じ平面上を循環するように見える。というより、それらは、名と対象とのひとつの結びつき方を、異なることばで説明しようとしているのであろう。そしてここでより正確に言えば、〝名と対象との結びつき〟ではなく、ある記号が先のような仕方であるものと結びつくということが、「名」ということにほかならない。つまり、記号のそうした用法が「名」ということばの意味を決めるのである。

以上のことを念頭において、『論考』における「名」の理論の要点をまとめると――

(i) 名はそれ以上分解できない単純な記号（シンボル）、原始記号である。

(ii) 名は対象を指示・代理し、対象が名の意義（Bedeutung）である。（名は意味〔Sinn〕をもたず、命題のみが意味をもつ）

(iii) 名は（要素）命題の脈絡の中でのみ意義をもつ。

これらのことは全て不可分に関係しており、そしてそれぞれの特徴は、単なる主張なのではなく、名が本来もっている論理文法を追求したひとつの帰結と見なされねばならない。そのことを検討してみよう。

例えば〝ガリアを征服した将軍〟のような表現（確定記述句）は、たとえ複合的表現であっても、ある特定の対象（人物）を指示しうるのだから、文法的には名と見なすことができる。その証拠に、それは〝カエサル〟という名と等値のものとして交換できる。（フレーゲの考え）。――しかし、その句は、〝カエサル〟が名であるような仕方で名なのではない。それは、ある特定の対象を指示するための名というよりも、ある対象が存在し、その対象がそのような句で述語づけられるという意味で、記述なのである。つまり、そのような句は分析さるべき複合的な「意味」をもっているし、ある対象について真もし

くは偽となるといういみで、命題のカテゴリーに入れた方がよい。けれども、〝カエサル〟はそのような意味をもたず、ある対象に真もしくは偽という仕方で述語づけられるのではない。[8]（ラッセルの記述理論。ウィトゲンシュタインは『論考』でこの考えをとり入れた。）

ところが、ここにはもう一つの論点が含まれていて、それをおし進めてゆく必要がある。〝ガリアを征服した将軍〟のような表現は一見して複合的な意味を表わしている。では〝カエサル〟といった、日常言語では疑いもなく「名」と見なされているものはどうか。これは意味をもたない単一記号であり、特定の対象を指示するためのまさに名――固有名――であると思われる。ところがラッセルの考えによれば、このような固有名も記述的な意味の内包を含んでおり、その内包によって使用と理解のコンテクストの中にあらわれうることばである。つまりこうした固有名は、ある記述群の代理的表現であり、一種の変装した記述句と見なされうる。

しかしこう考えられるとすれば、ここにはまた別の論点がからんでくる。つまり、ある人は〝カエサル〟の記述的内包として先の〝ガリアを征服した将軍〟のような句を考え、これを媒介的条件として、〝カエサル〟という語をある個体を指示するために使うかもしれない。その際どのようなものを条件として考え、どれが本質的でどれが偶然的かという基準の区別が問題になるかもしれない。いっそのことライプニッツのように、カエサルに述語づけられる全てのことがらを本質的として内属させてもよいかもしれない。――J・サールはこの点に関し次のように主張する。通常の固有名と同様、確定記述もまた特定の個体を指示するために使うことができる。しかし、固有名の方は確定記述とは違い、その対象の特徴を限定することなしに指示する。けれどもそれは何らの限定もなしにということではなく、「十分なしかしさしあたって未限定な数の言明がその対象について真であることを前提して」その対象を指示するのである。[9]――サールのこの主張は、固有名と確定記述の指示の仕方の相違を日常的な用法にそって明確にしているが、ここには問題があるように思われる。即ち、固有名がその対象を名指すために記述的な条件が不可欠なのだろうか？　もしそうならば、名は記述の準備ということについて循環が生

じてしまう。というのも、〝その対象だけにあてはまる記述的言明が真であること〟が、その対象を名によって指示同定することなしにどのようにして保証されるのか？　つまりそれは、〝カエサルはガリアを征服した将軍であり、……〟という言明となるはずである。それにまた、名指すための〝真なる前提〟とされるそれらの言明は、偽になる場合も可能なのである。これに対して、そのような記述言明において名が現われる必要はなく、ある名で呼ばれるべきある対象についてそうした記述が真とされているのだ、――と言われるかもしれない。しかしそうだとすれば、それは、言語のレベルと対象や物のレベルとを混淆してしまうことになる。ここには重要な問題がある。――しかしいづれにせよ、「名指し」ということは、「名」によってある対象をはじめてそのものとして指示同定することとして追求されねばならない。[10]

ここで再びラッセルの論点にもどってみよう。通常の固有名はそうした記述的内包を含み、その内包によって使用と理解のコンテクストの中で使われる。そこでラッセルは、何らの内包的コンテクストなしで純粋に指示をなし、直接に対象と結びつくような名こそが本来の名であるという文法を追求し、「論理的固有名」という概念にたどりついた。それは、「なんらコンテクストを必要とすることなくそれ自身で意味をもつ」。[11] 即ち論理的固有名とは、与えられた特定の個別者を直接かつ単独に指示し、一切のコンテクストから独立して意味をもつ単純なシンボルである。そしてそれの意味とはそれが指示する対象であり、その担い手である。――彼のこの論理的固有名の概念は様々の問題点をひきずってはいるが、ひとつの概念的な純化を得ている点で評価すべきである。そして彼はそのことによって次のことを目ざしていた。即ち、有意味な記述の条件を確立するために、何らかの言語的記述を先取的に前提することなく、先ずもって対象をはじめて言語（名）によって名指し、この名を主語とし、そして、他の記述的内包をもつ語（性質、関係等）をそれに述語づける……というふうに記述の論理文法を区別し固定すること、である。

『論考』の「名」は、ラッセルのこの論理的固有名に多く類似した特徴をもっている。このことは、『論考』がラッセルの

記述理論と分析のモチーフを取り入れている以上、偶然ではない。先に挙げておいた（30ページ）『論考』の名の特徴のうち、(i)と(ii)はその類似性を示している。そこで、名のこの特徴を、その指示対象の「単純性」ということと連関させて、『論考』の表現で確認しておく。

「名」は、単に対象を指示（代理）するということではなく、単純な対象を指示（代理）するということではじめて名としての資格を得る。そこで、もしある〝名〟が名指しているものが「複合的なもの」だとすれば、そのものは、それがいかなる単純な要素からいかなる仕方で合成されているかを記述文によって語ることができよう。そうすると、この後の方の文に出てくる、要素を指す名こそ本来の名であって、はじめの名はこの記述文の代わりということになる。そのようにして、全ての見かけ上の名とそうした名を含む記述は、この見かけの名が消滅して、全て真の名のみによって構成された諸命題に至るまで分析することができるにちがいない。このようにして到達しうる命題が「要素命題」である。そして、本来の「名」とはこのように、要素命題において、究極の単純なものに対してのみ指示的に使用されるシンボルであると固定することによって、意味の分節的構造化を確定し、その論理的構文型をただ一通りの仕方で定めることができるだろう。

このように、「名」が単純で原初的な記号であるということは、それが文の中で相対的に単純な記号であるということではなく、また単に指示的に使われているということでもなく、それが究極的に単純な対象の名であるということによるのである。ここからすれば、日常言語のほとんどの〝名〟はこの規準を満たさない。それはたいてい、複合物を指示する名として使われている。そしてウィトゲンシュタイン自身、実際『草稿』（ノートブック）でくり返しそのことを反芻した揚句[12]、先の帰結に至ったのだった。

その「対象」の基準にかかわる「単純性」と「複合性」という概念は難しい。『論考』では何ら具体例が与えられていないが、例えば「複合的なもの」を、〝時計〟や〝ホウキ〟が様々な部分から合成されている、といったふうに解すると奇妙なことになるに違いない。たしかにそれらも複合的なものであるとしても、『論考』の複合性と単純性の区別は物理的なもので

も認識論的なものでもなく、あくまで意味一般にかかわる論理的・形而上的なものである。『草稿』は次のように書きとめていた。「単純なものの観念は、複合的なものの観念と分析の観念の中にすでに含まれている。そこで何らかの単純な対象の例やこの対象が主題になる命題を全く度外視しても、この観念に到達するし、単純な対象の存在は論理的必然性としてア・プリオリに洞察される。」[13]――『論考』ではこの「単純な対象の存在」は「世界の実体」(二・〇二一)とも規定される。即ち、複合的なものは、諸要素から合成されているかぎり、それとは異なる他の合成が可能である(むろんこれは事実的なそれではなく、論理的な可能性である)。つまり、そうでないあり方が可能である。つまり複合的なものは、それが可能なひとつの「事態(事実)」だという意味で、消滅する(存在しない)こともありうる。だからこそこのことは、「真・偽」の可能性をもつ「命題」で記述さるべきことなのである。けれども、究極的な要素の方は、それらから全ての複合的なものが合成されるための究極にして単純の要素であるということによって、生成消滅することのない「世界の実体」なのである。[14]

(ちなみに、ウィトゲンシュタインは後に『哲学探求』で『テアイテトス』の一節を引用している。「……というのも、この根本要素に対しては名を与えることしかなく、それがもつのは名のみなのである。これに対し、それらの根本要素から合成されているものは、それ自体が組み合わされてできたものであるから、その名称もまたそのように組み合わされて言明となっている。……」そして、それに続けて次のコメントをつけている。「この根本要素がラッセルの〈個体〉でもあり、また私の〈対象〉でもあったのである。」[15]このコメントが認めているように、『テアイテトス』のその一節は、彼の名と対象の理論のみならず、引用文の最後の文が語っているように、彼の言明(命題)の写像理論についても、まるでそれを要約したようにあてはまる一節だと言える。)

このように、単純な対象とそれの名を分析の到達点として純化することによって、ウィトゲンシュタインは、名によって対象を指示同定し、その名の結合である命題によって事態を記述するという、記述(写像)の論理文法におけるレベルの区別を明確に確定しようとしていたのであり、また、写像としての言語と写像される世界との究極の接点を探っていたとみる

ことができる。

## 四　「名」の論理文法（二）

では、「名」と世界の実体である「対象」との結びつきあるいは関係とはいかなるものなのか。それは「指示」や「代理」、ないしは「名指し、名づけ（naming）」の関係ということになるのだが、その関係が名に意味（意義）を与えるとされるとき、それはいかにして論理の問題なのか。

ここで再びラッセルの「名（論理的固有名）」について、残しておいた重要な論点を検討する。ラッセルの場合、「名」は命題の脈絡から独立に「それ自身で（by itself）」「単独に（in isolation）」意味をもつ、とされていた。ではそれはどのようにして意味をもつと考えられたのか。それを多少再構成して与えると――。いま私の心にあるもの（単純な感覚与件とか個別者といった）が現前している。私はそれを、私の意識と注意が向けられているこの対象として認知し同定する。そこでこれに'a'という名を与える。かかる名づけによって名と対象の関係がなりたつ。かくしてこの対象が名'a'の意味となる……。この命名のプロセスは、所与の名の意味を理解する場合にも、同様のプロセスとして現われる。即ち、私が名'b'の意味を理解するとき、私は自分の心である特定の対象を認知同定し、そのものとかの記号とを直接結びつけるのである。（そして、これらは単にプライベートな作業なのではなく、このような〝私〟とそのメンタルなプロセスは、命名をし、名の意味を理解するすべての人に現われるであろう。）

これに関して二、三のコメントを与えると――。

(i)　このようにラッセルは、名がどのようにして意味をもつのかという問題に心理的あるいは認識論的な解答を与えるわ

けであるが、これは、名が記述を前提せず、また記述の脈絡から独立に単独で意味をもつとした以上、ひとつの自然な帰結であると思われる。即ちここには、名と対象との点と点をつなぐ一本のメンタルな糸が、言語と言語外のものとを結びつける――といった構図がある。

(ii) 「これは'a'である」という、いわゆる直示的定義の文は、かかる心的過程の記述か、あるいはそれを暗に前提した文と考えることもできよう。その場合、これは自律した正規の命題とは言えない。というのも、この文の主語「これ」は、実際は対象あるいはものなのであって、それと'a'ということばが結ばれる、ということを語っているにすぎないからである。ラッセルによれば、「これ」は、対象やものを直接かつ純粋に指示するまさに論理的固有名ということになるが、それは、かかる文においてものとことばとのレベルを混淆してしまうことにならないだろうか。つまりそれは、'a'が名であるような意味で、決して名ではない。(16)

(iii) 先のような心的なプロセス、あるいはそれを暗に含む直示的定義によって名の意味が与えられるとすることは、「名」の論理的な条件ではない。それは、個々の具体的な名が指示しているものを実質的に与えるための心的過程の記述である。ある記号に対してある対象を与え、あるいはある対象にある記号を与えるということがその記号を名とするというより、「名」という論理的形式が名とその対象という関係をそれらの間に与えるのである。つまり、一般に「名」とはいかなる論理的な用法をもつことばなのかをア・プリオリに理解しているからこそ、直示的定義による名の定義もまたできるのだ、と思われる。

(iv) しかしそうだとはしても、やはり、それぞれの名に対してその意義である指示対象を実質的に与える心的な作用ということは、『論考』における不透明な部分として残る。『論考』の立場ではそうしたことは心理学的・認識論的な問題であって、ア・プリオリな論理の問題ではない、ということになる。しかしこのことはかえって、そうした心的作用を認め、前提したうえで、それを言語の論理の事柄でないと考えた、ということであるように思われる。(17) いずれにせよ『論考』では「論

理的」（ア・プリオリ）ということがあまりに厳格に、あるいは狭く考えられており、そうでなければ〝心理学的・認識論的・経験的（アポステリオリ）・現象的……〟という伝統的な区分けが踏襲されているように思われる。後のウィトゲンシュタインは、より柔軟なカテゴリーを開拓してゆくことになる。

しかし（以上の論点をカッコに入れたうえで）、ここで最後に残った重要な問題を検討せねばならない。即ち「名は命題の脈絡の上でのみ意義をもつ」（三・三）ということについてである。これがまた、ラッセルの「名」との決定的な相異点なのでもある。

これまでの限りでは、名指しはちょうどものにレッテルを貼る作業のように見える。即ち、対象を$g_1$、$g_2$とし、それぞれの名を'a'、'b'とすると、'a'→$g_1$、'b'→$g_2$という結びつきがなされる。そして、実際このことがなされてしまえば、名とその意義にとって必要なことは全て終っているように思われる。――即ち、そこには何の論理的（ロジカル）な問題はない。問題はそこから先、即ちそのようにしてたくわえた名のリストを使って命題を作り、そこではじめて真偽と知識の問題が始まるところにある。つまり名はロゴス（言語・論理）以前の、あるいは知にとっては質料的（マテリアル）なものであって、意味の論理には本質的にはかかわらない……。しばしばこのように考えられて来た。しかし、名づけや名指しは単に、もの言わぬマテリアルな要素や裸の個体に任意のレッテル記号を貼りつけることで済むようなトリヴィアルな作業なのではない。名は対象（もの）を指示するのであって意味（ジン）をもたないということは、名の文法が意味に関わらない非論理的・前言語的なことがらだということにはならない。

そこで、「命題のみが意味（ジン）をもつ。名は命題の脈絡の中でのみ意義（ベドイトゥング）をもつ」（三・三）、はどう解さるべきか。(i) 日常的な〝名〟あるいは〝語〟の場合、これはうなづける主張である。それらの語は辞書に整理されているようないくつかの意味をもっている。その語がどの意味を示すのかは、その語が使われる文のコンテクストによって定まるだろう。だがこれは明

らかにウィトゲンシュタインの論点ではない。彼の「名」はそのような複合的な意味の束ではないし、ひとつの名がひとつの単純な対象を指示するような原始的なシンボルだからである。(ii)では、ひとつの名'a'がひとつの対象$g_1$を指示するのならば、この名は、それがどんな文の脈絡のうちにあらわれようと、同一の対象$g_1$を明晰かつ固定的に指示しているはずである(しかも対象は、不壊不滅の単純実体なのである)。とすれば、ラッセルが考えたように、名は文の脈絡とは関わりなく、それ以前にすでに単独で意義をもつ、と言えるのではないか?

(ii)はいわば、半分あたっていて半分あたっていない。そのジレンマを脱するために、ウィトゲンシュタインの「対象」の存在論的性格を確認しよう。「もの〔対象〕は、それがあらゆる可能な状況にあらわれることができる点では、独立している。しかしこの独立性の形式は、事態との脈絡の形式であり、非独立性の形式である。(語が単独の場合と、命題における場合と、二通りの異なった仕方であらわれることはあり得ない。)」(二・〇一二二)　即ち、対象(もの)はそれ自身として見れば不変の単純実体だが、他方、「事態の構成要素となりうることが、ものにとって本質的」(二・〇一一)なのである。つまり対象は他の対象と結合してひとつの事態を形成するが、この結合の可能性は、「もののうちにすでに予定されている」(二・〇一二)。つまり、ある対象が他のどの対象と結合していかなる事態を形成するかという可能性が、この対象の本質的規定をなす。この可能性は「対象の形式」とか「内的性質」と呼ばれる。例えば〝ド〟や〝レ〟(がウィトゲンシュタインの言う対象だとして)は、〝音〟という形式、あるいは音というものがもつ諸形式(高さ、強さ、調子(トン)……)をその内部にもつことによってはじめて、そうしたひとつの単純な対象なのである。同様に、〝赤〟や〝青〟は、〝色〟という論理形式をもつことによって……。

そこで、対象(もの)がその内的性質としてもつそうした論理形式は、それを指示的に代理する「名」に、名がもつ論理文法として反映されるであろう。――これが、写像理論の重要な契機である。即ち、それぞれの名は、それがどのような可能な命題の脈絡に使用さるべきかという構文法(シンタクス)を、それ自身のうちにもっている。そしてこれは、それぞれの対象が、それがどのような可能な事態の脈絡にあらわれうるかという論理形式を自身のうちにもっている、ということの反映(写像)なのである。

むろんこれは、事態と像に共通な論理形式であり、像において示されるべきことであって、実際の写像は、個々の要素命題として与えられる。[18] そしてウィトゲンシュタインは、対象は、それを繋ぐ媒介項なしに、直接に「鎖の輪のように」結合する、[19] と言う。つまり対象は、単純な要素ではあるが〝質料的〟なものではなく、従ってまたそれに外的な〝形式〟によって外から秩序づけられるのではない。対象は、それ自身で他との結合の可能性（形式）をもっている。「実体は形式と内容である」（二・〇二五）。彼が後に与えたもっと分かりやすい比喩によると、対象はちょうどそれぞれが特有の結合の形（歯）をもった「歯車」のように直接に噛み合う。しかし、その対象を名指す名が、その反映としてそのような構文形式を自らの内にもっているということは、一見したところ、単純な記号としての名―'a'―のどこにも表わされていない。けれども、「記号が呑みこんでいるもの、それを記号の適用が表出する」（三・二六二）。即ち、名の構文法は、それが他の名と関連づけられてひとつの命題を形成する、ということによって示されるのである。「論理的構文法の規則は、個々の記号がいかに表示するかを知れば、自ら理解されるはずである。」（三・三三四）

したがって、ある対象をひとつの名によって指示同定するということは、つまりはまた、ある名の意義を理解するということは、その名がいかなる命題のコンテクストで使われうるかという使用の文法（用法）を与え、理解することに他ならない。[20]「記号におけるシンボルを把握するためには、その有意味な使用に注目せねばならない。」（三・三二六）それゆえ、その用法を示す可能な命題の脈絡から独立に名に意義を与える、ということはできない。つまり、名と対象を、恰も点と点を一本の線で直接に結びつけることによって名指しの関係が完了するかのように見なすことはできない。そのような名の意味付与の理論は、言語と言語外のものとを直接に結んでしまう、何かミスティカルな説明である。しかしもしそうならば、そのようなことば（名）によって有意味な文を作ったり理解したりできるということは、さも不可思議なことになるであろう。というのも、そうした名の把握の仕方においては恰も、表面的にはことばと見えるもののうちに（ことばの外なる）ものが直接にもちこまれており、奇妙な仕方で混在していることになるだろうからである。「論理的構文法において記号の意義はい

かなる役割もはたしてはならない。それは記号の意義に言及することなく確立されねばならない……」(三・三三)。

## 註

(1) 以下、( ) 内の数字は『論考』の各節の見出しナンバーである。

(2) 「それ自身の(seiner selbst)」という言い方は、変数とその関数という区別を曖昧にしてしまう響きがある。——いずれにせよこれは、f(P)=P という、数学の恒等関数 (恒等写像) に相当する。

(3) 例えば経験的検証や科学的検証。

(4) 言語による写像の場合、これは名と対象の対応づけにあたる。しかし、言語の場合にはこの対応づけをどのようになすのか特有の難しさがある (模型の場合には言語を使ってすればよかったのだが……)。これが、「名」の理論の要となる。

(5) 「構造」は「形式」とは違い、それぞれ異なる。例えば、要素 a、b がある場合、〈a—b〉と〈b—a〉は異なる構造であり、従って異なることを「意味」する。

(6) 即ち、名は命題という像の中でその対象と対応する、ということ。

(7) そして、これが要素命題の重要な条件のひとつなのである。この点については、G. E. M. Anscombe, *An Introduction to Wittgenstein's Tractatus*, 1959, (University of Pennsylvania Press), P. 34~35. を参照。

(8) だが、〝あれ(彼)はカエサルである〟は、真偽を云々できるのではないか。——しかしその場合この言明は、すでに〝カエサル〟が「名」として意義をもっていること、即ちある特定の人物を指す名であることが前提されていてのみ、真偽を云々できるのである。

(9) J. R. Searle, "Proper Names" in *Mind*, Vol. 67 (1958), P. 170~171.

(10) サールの先の論点についての批判はまた、Saul A. Kripke, *Naming and Necessity*, 1980, Lecture II. (Blackwell and Harvard Uni. Press) を参照。

(11) B. Rusell (with A. N. Whitehead), *Principia Mathematica*, Vol I, 1927, 66.

(12) L. Wittgenstein, *Notebooks 1914～1915*, 2 ed., (Ed. by G. H. von Wright and G. E. M. Anscombe, Blackwell). 特に、1915. 5. 20, 1915. 5. 30 など。

(13) Ibid., 1915. 6. 14.

(14) それゆえ、〝名の担い手が存在しない（破壊された）場合、その名は無意義となる〟という問題はここでは起こらない。

(15) L. Wittgenstein, *Logische Untersuchungen*, 46.

(16) 「混乱を引き起こしたくないなら、これらの語（「これ」や「それ」）が何かを名ざしているなどと、決して言わないことが一番よい」。L. Wittgenstein, Ibid., 38.

(17) このことは、『論考』後の彼の哲学の展開に重要な意味をもつ問題である。この論点に関しては、菅豊彦氏「直示的定義について」（『テオリア』第22輯、九州大学教養部、昭和54年3月）、「〈ウィトゲンシュタインと色〉についての覚書き」（『テオリア』第26輯、昭和58年9月）、『知の地平』（菅、井上義彦氏共著、法律文化社一九八四）――を参照。

(18) 対象の「形式」あるいは「内的性質」は命題によって「語る」（記述する）ことはできない。例えば、〝ドは音である〟〝赤は色である〟は、その真偽を論ずることのできるような「命題」ではない。それらのこと（即ち対象がそうした形式をもつということ）は、その名が現われうる命題の有意味性を構成する構文法として、「示される」ことなのである。かかる問題については、奥雅博氏「『論理哲学論考』における〈形式〉の意味」（『ウィトゲンシュタインの夢』（一九八二年、勁草書房）を参照。

そこで、〝対象がある性質をもつ〟、あるいは〝対象がある集合のメンバーである〟ことを語る命題――例えば fa ――は、その性質をその対象がもたないこともありうるような性質、すなわちウィトゲンシュタインの言う「外的性質」（四・〇二三）と対象との結合を語る命題である。次の注も参照。

(19) しかし、'aRb' といった型はともかく、'fa' といった型の命題が、〝対象と対象との結合〟を語る命題だというのは奇妙にも思われる。これは多くの人によって指摘されてきた。例えば、fa においては対象は一つ（'a' が名指す）しか現われない、と。けれども『論考』では、もしこれが要素命題であり、従って対象と対象との結合を名と名の結合によって示すのだとすれば、fx（いわゆる性質）は対象を指示する名と考えざるを得ない。（しかし、この点についてはウィトゲンシュタイン自身あいまいである。例えば、四・一二一一、四・一二七二などでは、'a' のみが対象であるかのように語る）。そして、『論考』の「対象」は単純なものということ

となのだから、性質も対象と考え、その限りで「名」で指示するとしても、不都合はないと思われる。この場合には、〝ものとその性質〟〝メンバーと集合〟〝主語と述語〟というカテゴリーは、それをかえって分かりにくくしてしまう。(同様に「外的性質」という言い方も)。

(20) 名の意味を、「命題のコンテクスト」と関連づけ、その「用法」において問うべきであるという、一貫した解釈としては、Hidé Ishiguro, "Use and Reference of Names", in *Studies in the Philosophy of Wittgenstein*, 1969 (ed. by Peter Winch, Routledge & Kegan Paul).

(福岡工業大学非常勤講師・昭和五十五年本学大学院博士課程修了・哲学)